

リプロダクティブ・ヘルス/ライツとは、「女性が生涯にわたって身体的・精神的・社会的に良好な状態にあることを保障するとともに、自分の身体について知識をもち、安全な性生活を営み、子どもの人数や出産の時期、避妊方法などの自己決定権をもつことを尊重しよう」という女性の性と生殖に関する健康と権利の確立にかかわる包括的な考え方です。1994年国際人口開発会議において提唱され、女性の人権の重要なひとつとして認識されています。政府は「男女共同参画基本計画」（平成12（2000）年12月策定）の11の重点項目のひとつに「生涯を通じた女性の健康支援」を掲げ、女性も男性もからだの特徴を理解し合い、思いやりをもって生きていくことが男女共同参画社会の形成の前提としています。

からだに関する相談窓口

■一般健康相談

西宮市保健サービス課 0798-35-3127 月～金曜日 9:00～17:15

■感染症（HIVなど）・精神保健に関する相談

西宮市健康増進課 0798-26-3667 月～金曜日 9:00～17:15

□“女・からだ・110番”

ウイメンズセンター大阪 06-6930-7666 第1,2,3木曜日 13:00～20:00
（ただし、祝日が重なった場合と、8月は休み）

□からだの電話相談

里の家助産院 0794-87-1217 火・木・金曜日 10:00～15:00

ウェブ 女性のための相談室

■電話相談

0798-64-9499

月・木曜日 10:00～12:00/13:00～16:00

■面接相談

0798-64-9498（要予約）

火・水・土曜日 10:00～12:00/13:00～15:00

※ウェブ図書・資料コーナーでは、冊子で紹介している以外にも図書・ビデオなどを揃えています。閲覧、貸出もしていますので、お気軽におこしください。

リプロダクティブ・ヘルス/ライツ
わたしが決める わたしの生き方
— 豊かな性と生のために —

発行 西宮市男女共同参画センター ウェーブ
〒663-8204
西宮市高松町4-8 プレラにしのみや4F
TEL.0798-64-9495 FAX.0798-64-9496
発行日 平成14（2002）年3月
制作 (株)オフィス・オルタナティブ

リプロダクティブ・ヘルス/ライツ

わたしが決める わたしの生き方

— 豊かな性と生のために —

そんなに前ではないころのお話

あるとき私は「愛されること」「認められること」を人に望むのは止めにしようと決めた。でも、「愛すること」をやめたわけではなかった。むしろ、ひたすら愛されたいと望んでいたときよりも軽やかに、のびのびといろんな人を好きになっていった。愛することが行動に結びつき、その結果には責任がついてまわることも学んだ。

最初に突きつけられた責任は、好きな男から「女らしくない」という評価の果てに“わかれ”を言い渡される現実を受け入れることだった。SEXをするときは、誰と、いつ、どこで、どんなふうにしたいのかを自分で考え、決めたかった。しかし、女には従順さが強く望まれていた当時のカップルにはそれなりのお作法があり、女は選ばれて、誘われて、そのときがきたら素直に従う、という役割と暗黙の段取りがあった。だからその決まり事ははぐらかされた彼はとまどい、私を受け入れなかった。

私にとって「愛されること」と「愛すること」のちがいは恋愛の成就をわかつほど、人生の明暗を決定づけていた。この“責任”は痛手ではあったが、おかげで彼の求めているものが「女らしさ」なのか「私という女」なのか手っ取り早くのみみだめた。

一人ひとりの女がみんな別々で、それぞれがどんな性を生きたいのか、いろんな生き方、考え方があるのにそれを誰も聞かなかったころのお話。

河村潤子（フリーライター）

女性の生涯にわたる「健康と権利」のすべてを含む考え方は

リプロダクティブ・ヘルス/ライツとは「女性が生涯にわたって身体的・精神的・社会的に良好な状態にあることを保障するとともに、自分の身体について知識をもち、安全な性生活を営み、子どもの人数や出産の時期、避妊方法などの自己決定権をもつことを尊重しよう」という考え方で

この考え方が出てきた社会的背景やメッセージを、性と生殖の歴史を研究テーマにされている荻野美穂さんにうかがいました。



荻野 美穂
大阪大学大学院文学研究科教員。専門は近現代女性史、ジェンダー論。著書に「ジェンダー化される身体」「生殖の政治学」「中絶論争とアメリカ社会」など。

からだと性の自立を求めて

1960年代から70年代にかけて、日本でも欧米でも女性の権利を獲得する動きの中から、からだの自立を求める声が高まってきました。その後、「女性の生殖・妊娠・出産・中絶の権利」と「女性の自己決定」を表す概念としてリプロダクティブ・ヘルス/ライツということばができました。日本で知られるようになったのは、おもに1994年のカイロ会議（国際人口・開発会議）以後です。

現在では、リプロダクティブ・ヘルス/ライツには、妊娠や出産だけでなく新生児の病気や低体重、栄養の問題、性感染症、エイズ、性暴力、薬物、それから更年期など、いろいろな問題が含まれるようになってきています。

女性の状況が生み出した主張

子どもを産む機能が女性にあるために、パートナー、家族、宗教や町・村という共同体、国家などが、女性のからだを管理し、女性の生き方に干渉してきました。

例えば現在、発展途上国は、国際社会から人口を減らせといわれ、さまざまな避妊に関する援助を受けています。そのひとつアプラントという避妊方法は、ホルモンの入った小さいカプセルを、女性の腕に手術で埋め込むものです。2〜3年排卵を抑制する効果があり、本人がやめたいと思っても簡単にやめることができません。

このように、女性の意思とは関係なしに、もっと産め、産んではいけない、妊娠したら墮せ、墮してはいけないと、女性のからだは権力によって管理されてきた歴史があります。

それに対する異議申し立てとして出てきたのが、「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」の主張なのです。からだの自由のないところに、権利もありません。

からだや性の知識がないためにおきた事件

これまで女性がからだや性について話すのは恥ずかしいこととされ、受身的であることを期待されてきたため、避妊は男性まかせ、からだは医者まかせという状況を生み出してきました。

1980年、非常にショッキングな富士見産婦人科事件*がおきました。医師の資格をもたない理事長の虚偽の診断により、多くの女性が子宮や卵巣の不必要な摘出手術を受けたという事件です。

このような事件がおきた背景には、女性がかからだや性に関して情報を得る機会が少なく、基本的な知識をもっていないことや医者に対してわからないことは聞くという姿勢がなかったためです。この事件をきっかけにして、女性の間では、主体的に自分のからだや性を知り、情報交換をしようと、電話相談を開設したグループや医療を考えるグループなどができてきました。しかし、事件から20年以上たった今でも、女性が自分自身のからだや性に関する正確な知識をもつことができるようになってきているかという、まだまだ不十分だと思えます。

生き方は自分が決める

わたしたちが、どのような選択をするにしても、時代や社会からの影響を受けます。女性にとって問題なのは、この方法しかないのだと思込まれることです。

そうならないようにするためには、まずは、いろいろな情報を手に入れること。リプロダクティブ・ヘルス/ライツには、知ることや教育を受ける権利も含まれているのです。次に、自分で考える。他の方法はどうか、あるいはどういうメリットとデメリットがあるかを十分に考えます。そして、最後に、「自分が決める」ということです。

性と生殖の権利は、必ず自己決定権と一緒にあることに大きな意味があり、女性が自分らしく生きるために必要なことなのです。

*富士見産婦人科事件

1980年、埼玉県富士見産婦人科病院において、癌検診やおりもの、少量の出血、腰痛などで病院を訪れた女性に不必要な手術を受けさせた事件。1999年、同病院の理事長、院長の行為を医療犯罪と認めた判決がようやく言い渡された。

“性”のあり方は一人ひとりちがう

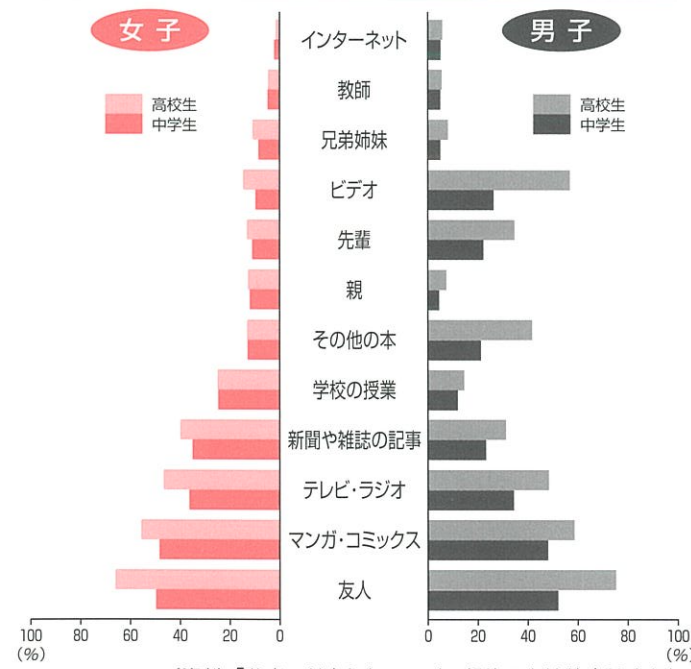
一人ひとり性格や顔がちがうように、性のあり方も多様です。だれもが本人の意思に反した「性」を強制されることなく、自由に決定し、責任を負う権利をもっています。

自分をたいせつにする

中・高生の性に関する情報源は、男女とも「友人」がもっとも多く、次いで「マンガ・コミックス」「テレビ・ラジオ」。男子の場合は女子に比べて「ビデオ」が多く、メディアの情報が10歳代の性意識に大きな影響を与えていることがわかります。しかし、メディアから流れる性に関する情報は、男女で異なる性道徳や女性を性行為の対象として描いているものが多く、メディアの情報を基準にした性のあり方にはさまざまな問題があります。

性の行動をともにする人間関係は、自分をたいせつにすることのうえに築かれるものです。しかしそれは自分の気持ちを優先するという意味ではなく、相手の意思も尊重し、相手が性行為をしたくないと考えている場合は強要すべきではないということです。自分が望まない性行為は拒んでいいのです。

性にかかわる意識や行動に影響を与えたと感じるもの



人権とセクシュアリティ

「セクシュアリティ」ということばは、性別、恋愛や性行為を行う相手、また、それら恋愛にかかわる意識、行動、傾向などのすべてを包括する概念として、広い意味で用いられることが多いようです。

1998年に、日本ではじめて「性同一性障害」(こころの性がかからだの性と反対で、こころの性に合わせてからだの性を変えたいと望む人々の医学的診断名)の最終的な治療法として性再指定手術(性別適合手術や、俗に性転換手術とも呼ばれる)が行われ、マスメディアを通して、からだの性に違和感を抱いている人々の存在が広く一般に知られるようになりました。このころから、「性」的マイノリティの立場に立つ当事者が活発に発言をはじめ、以前から精力的な活動を行ってきた「ホモセクシュアル(性愛の対象が同性である人々。日本では、男性の場合をゲイ、女性の場合をレズビアンと呼ぶのが一般的。)」のグループのほか、「インターセクシュアル(解剖学的に中間的態様を示す人々。)」や「トランスセクシュアル(からだの性よりこころの性に合わせて生きたいと願う人々。手術を望む、ホルモン療法だけを望むなど、人によってさまざま。)」などの当事者を中心としたグループが、「性の多様性」について社会的認知を求める活動を繰り返してきました。

一般に、異性と恋愛し結婚し性行為を行い子どもを産む、という生き方が当たり前と考えられています。しかし、このような当事者グループの問題提起から、私たちは性のありようが世間一般に認められているひとつの形しかない、というのではなく、実際には、人の性はさまざままで、誰かから強制されるのではなく、自分独自の生き方を追求してよいのだということを知ります。

強制や差別、暴力のない、性と生殖に関する健康と、自らのセクシュアリティに関する事柄を管理し、自由で責任ある決定を行う権利は女性の人権のひとつです。

桂 容子(大学非常勤講師)

図書資料コーナー

ジェンダー化される身体 荻野美穂著(草書房) ジェンダーと歴史学 ジョーン・W.スコット著 荻野美穂訳(平凡社) 生殖の政治学 荻野美穂著(山川出版社) 男性論 荻野美穂ほか編(人文書院) 中絶論争とアメリカ社会 荻野美穂著(岩波書店) 愛!? ジェーン・ウェグシャイダー・ハイマン著 荻野美穂訳(松香堂書店) からだ・私たち自身 ポスト女性の健康の本集(松香堂) 新・からだノート 中山千夏著(ネスコ) おんなのからだ健康の本 佐々木静子著(はまの出版) 女のからだわたしたち自身 森冬実ほか著(毎日新聞社) リプロダクティブ・ヘルス/ライツ ヤンソン柳沢由美子著(国土社) リプロダクティブ・ヘルスと環境 上野千鶴子ほか編著(工作舎) 性と生殖に関する権利 リード・ポーランド著(明石書店) 性のタブーに挑んだ男たち 山本直英編(かもがわ出版) 開発と健康 青木温子著(有斐閣) WHO勧告にみる望ましい周産期ケアとその根拠 井上裕美ほか監訳(メディカ出版)

図書資料コーナー

性の自己決定 原論 宮台真司ほか著(紀伊国屋書店) 性幻想 河野貴代美著(中央公論新社) セックスは自然な行為か? レオノア・ティーター著(新水社) 誰も教えてくれない性知識 石浜淳美著(メディカ出版) 性的虐待を受けた人のボディ・タイプ・セックス・ガイド スティニー・ヘインズ著(明石書店) 私が私を愛するとき ベティ・ドッドソン著(二見書房) 異性愛をめぐる対話 伊藤信ほか編著(飛鳥新社) 実践するセクシュアリティ 風間孝ほか編集(動くゲイとレズビアン) セクシュアリティの歴史社会学 赤川学著(草書房) 性の倫理学 伏見憲明著(朝日新聞社) トランスジェンダーの仲間たち 虎井まさ衛著(青弓社) 性のグラデーション 橋本秀雄著(青弓社) バイセクシュアルという生き方 フリッツ・クライン著(現代書館) 「レズビアン」である、ということ 掛札悠子著(河出書房新社) 同性愛がわかる本 伊藤信著(明石書店) 現代思想Vol.25-6レズビアン/ゲイ・スタディーズ(青土社) セクシュアリティ4さまざまな「性」を生きる(エイデル研究所) ガールズガード 赤枝恒雄著(WAVE出版) 初めてのSEX 河野美代子ほか著(集英社) 女の子のこころから丸本百合子著(ゆうエージェンシー) 男の子の性の本 メンズセンター編著(解放出版社) わたしの性ってなんだろう 深江誠子著(ウイメンズブックストア松香堂書店) ほんとうに知りたかったカラダのヒミツ 山本直英監修(講談社)

産む、産まないは自分で決める

子どもを産まない人、子どもを産めない時期、一人ひとりの状況は異なります。女性が自らの選択にもとづいて責任をもって自分で決めることが、自分の人生を生きるということです。

納得のいく出産をするために

病院、診療所で出産するのが一般的になったのは、1960年代以降のことです。自宅分娩が中心だった時代に比べて妊産婦死亡率、新生児死亡率は大幅に低下しました。しかし、最近では病院の画一的な出産に満足しない人たちが助産院で出産したり、また自宅出産を手がける産科医が話題になるなど、産み方の選択肢は広がっています。

どこでどのような方法で出産するにしても、医師や助産婦に自分の希望を伝え、不安や疑問に対しては十分な説明を受けることが納得のいく出産につながります。

性感染症 (STD) 予防は避妊とは別なもの

性感染症とは、性行為によって感染する病気をいいます。原因はウイルスや細菌などで、たった1回の性行為でも感染する可能性があります。エイズなど命にかかわるものや薬で簡単に治るものなどさまざまですが、感染初期に症状がないものが多いため、気がつかないうちに他の人にうつしたり、うつされたりしてしまいます。なかでもクラミジア感染症は、女性がかかる性感染症としては患者数がもっとも多く、その数は年々増加しています。自覚症状が乏しいため、気づかないまま病気が進行し、子宮内膜炎など合併症を起こす場合もあります。

性器に痛み、炎症、発疹などの異常や、おりものが増えたりしたときは、性感染症の疑いもありますので、受診しましょう。ただし、自分だけではなくパートナーも治療しなければ感染を繰り返すことになります。治療の原則は“パートナーと一緒に治療する”ことです。

1998年の厚生省の調査によると、性感染症の治療を受けた人は全国で60万人、そのうち女性は男性の1.4倍。ピルやIUDなどでは妊娠を避けることはできません。性感染症を予防するにはコンドームが必要です。性感染症は自分の意志でできることのできる病気なのです。

※低用量ピル
医師の処方箋があれば薬局で手に入れることができる。しかし、副作用の心配や毎日一定の時間に飲まなければならないなど女性の負担は大きい。

妊娠を希望しないなら、避妊は不可欠

子どもを産むか産まないか、産むとすればいつ、何人産むのかを計画するには、避妊は必要不可欠です。

生殖責任は女性にも男性にもあります。しかし避妊に失敗したリスクは女性だけが負うために、男女の避妊に対する認識にも差が出ます。日本の一般的な避妊方法としての男性用コンドームは、正確に使えば高い避妊効果をえられますが、女性が管理できないという面があります。

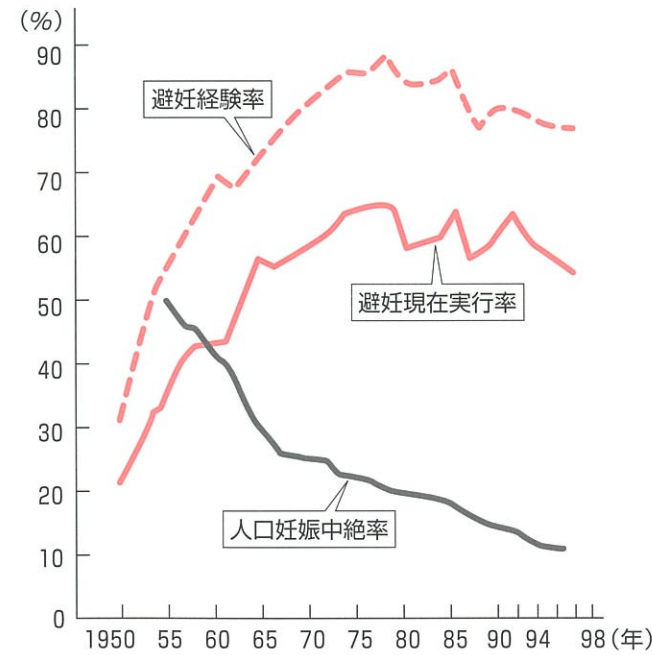
女性が主体的に使える避妊方法には、1999年に承認された低用量ピル※をはじめ、IUD(子宮内避妊器具)、殺精子剤、女性用コンドームなどがあります。欧米では、ピルは女性自身が妊娠をコントロールでき、効果が高いことから一般的になっています。

産むか産まないかを決めるのは女性自身

100%完全な避妊方法はないので、望まない妊娠、予期しない妊娠はおこりえることです。望まない妊娠をした場合、選択肢のひとつとして人工妊娠中絶※があります。医療行為として安全な人工妊娠中絶を受けられることは、女性の健康と権利を守ることなのです。

※人工妊娠中絶
人工妊娠中絶は、「刑法」の堕胎罪にあたり処罰の対象となる。ただし、「母体保護法」では特定の理由のある場合に限り人工妊娠中絶を認めており、現在実施されている人口妊娠中絶の99%は経済的理由による。女性の権利として認められているわけではない。

避妊実行割合と中絶率の推移



(資料:「女性のデータブック 第3版」有斐閣)

女性の役割を「子どもを産むこと」にしている社会

現在、不妊は10組に1組、不妊治療のために医療機関を受診している人は約30万人といわれています。不妊に悩む人の自助グループ「フィンレージの会」の柘植あづみさんに不妊から見える問題についてうかがいました。

「結婚したら子どもができて当たり前、子どもを産めない女性は普通ではない」という世間の固定観念があるために、不妊とわかった女性は大きなショックを受けます。「不妊治療を受けるかどうか、受けるとしたらどんな治療を受けるか、そしていつやめるか」を決めるためには、副作用や成功率などの情報が示されなければなりません。現在の医療機関では十分に情報が与えられているとはいえません。また、女性は子どもを産むことを期待されているため治療を受けない選択をする人は少数です。生殖技術の進歩によって、子どもをもつ可能性は広がりました。しかし必ず子どもができるというものではないにもかかわらず、治療しても妊娠しない自分だめな人間だと感じてしまう人もいます。不妊治療はからだの痛みや副作用だけではなく、精神的にも大きな負担を強いているのです。

フィンレージの会は、子どもが欲しいという気持ちを尊重しながら、「がんばって産もうねではなく、子どもがいなくても差別されない社会、子どもができなくても納得いく人生を送ることがたいせつ」と考えています。会で話し合ううちに、「女は子どもを産んで一人前」という価値観が社会だけではなく自分の中にもあったという矛盾に気がつきます。

不妊の人の「リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」とは、不妊の状態もあるがママの健康状態、自分なりのあり方であると認めたものなのです。

フィンレージの会
・会員:約500人/例会:月1回
・1991年に出版された「不妊—いま何が行われているのか」(レターナ・クライン著 晶文社)という翻訳書をきっかけに設立。全国に約20の自主運営グループがある。不妊で悩む人たちの交流と情報交換に加えて、不妊や不妊治療で産まれた子どもへの偏見をなくす活動もしている。
・ニュースレター:「フィンレージの会」便り 隔月発行
・発行物:「新・レポート不妊 不妊調査の実態と生殖技術についての意識調査報告」(2000年)など。
<http://www.5c.biglobe.ne.jp/~finrage/>

図書資料コーナー

私たちがお産からあなたのお産へ ぐるーぷきりん編(メディカ出版) 病院で産むあなたへ 陣痛促進剤による被害を考える会編(さいろ社) 女はなぜ子どもを産まないのか「女の人権と性」実行委員会編(労働旬報社) 産む/産まないを悩むとき 丸本百合子ほか著(岩波書店) 助産婦 矢島床子著(実業之日本社) 産むかもしれないあなたへ きくちさかえ著(NECクリエイティブ) 産む! 本間千恵子ほか共著(あおば出版) 産みたい(からだ) 村瀬ひろみ著(春秋社) たのしく、出産 村本邦子編著(新水社) お産選びマニュアル 河合蘭著(農山漁村文化協会) 大出産傾向と対策 清水ちなみ監修(扶桑社) 赤ちゃん、遅く産んでもいいじゃない 真野朋子著(講談社) 自然なお産を求めて 杉山次子著(勁草書房) 笑う出産 まついなつき著(情報センター出版局) 夫婦でいとお産をしよう 正木かよ著(メディカ出版) イタイタイは 男の出産物語 夏野隴石著(日本図書刊行会) 安心して使える初めてのピル 池下育子監修(宙出版) やさしい低用量ピルの自己管理 多賀理吉監修(医薬ジャーナル社) 中村先生、ピルって何ですか? 中村理英子著(ベストセラーズ) ピルと性感染症がよくわかる本 加藤俊治著(有紀書房) つくられる生殖神話 柘植あづみほか編(制作同人社) 女性と出生前検査 カレン・ローゼンバークほか編(日本アクセル・シュプリンガー出版) 出生前診断 江上彩織著(新風舎) 生命誕生をめぐるバイオエシックス 金城清子著(日本評論社) 生殖

技術とジェンダー 江原由美子編(勁草書房) 避妊 早乙女智子著(主婦の友社) 不妊 いま何が行われているか レナーテ・クライン編(晶文社) 優性思想の歴史 スティーブ・トロンブレイ著(明石書店) やさしい避妊のすべて 加藤俊治共著(有紀書房) 彼と彼女の避妊講座 池下育子監修(ナツメ社) 文化としての妊娠中絶 マルコム・ボッツほか著(勁草書房) 女の性と中絶 社会評論社編集部編(社会評論社) 中絶 ロジャー・ローゼンブラット著(晶文社) 学生のための性とエイズ 木村竜雄ほか著(朝倉書店) 女性とエイズ ダイアン・リチャードソン著(新水社) エイズとSTD 北沢杏子著(岩崎書店) 女性のための女医さんガイド 堀口雅子監修(法研) なぜ婦人科にかりにくい? まつばらけいほか著(築地書館) 乳がん・子宮がん専門医ガイド 松井宏夫監修(婦人生活社) わかりやすい女性の医学事典 池下育子監修(ナツメ社) 疲れる恋愛、癒される恋愛 中村理英子著(ベストセラーズ)
■ビデオ
中絶 I-からだ編 II-こころ編 ワーク・イン(財)横浜女性性協会) 子宮筋腫「わたしの選択」グループKAYAKO(財)横浜女性性協会) 私のえらぶ乳がん治療 グループKAYAKO(財)横浜女性性協会)

自分とゆっくりつきあおう

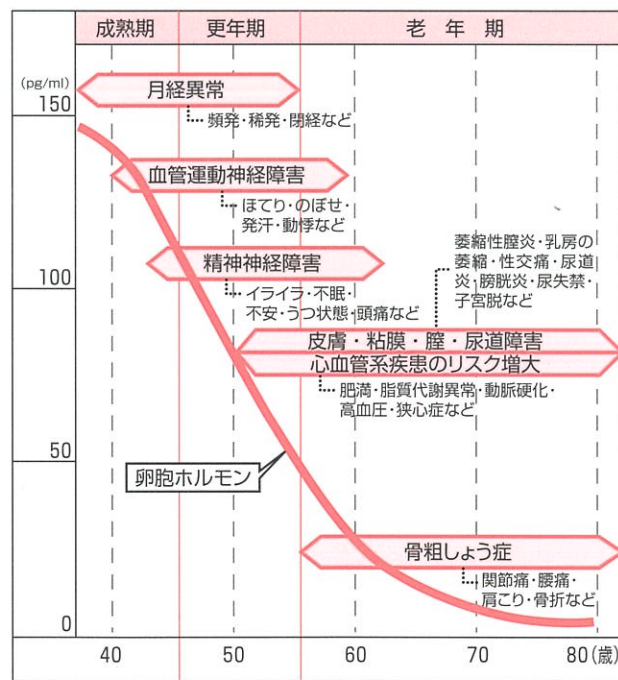
更年期とは、性ホルモンが低下しはじめ、生殖機能が終了に向かっていく移行の期間といわれています。自分のからだをどのようにいたわっていくかを再検討する時期でもあります。

更年期のイメージにまどわされないで

閉経の前後10年余りを更年期といいます。40歳をすぎることから卵巣の老化が原因で、エストロゲン（卵胞ホルモン）の分泌量が急カーブで落ち、分泌状態が不規則になるために、こころやからだに更年期特有の症状があらわれます。ただし、個人差があり、いつの間にか過ぎていたという人もいます。

更年期の問題は、この時期の女性に対する評価が非常に低く、女性自身もマイナスイメージをもっているという社会的な一面があります。

更年期のしくみと症状



(資料:「わかりやすい女性の医学事典」ナツメ社)

治療を受けるのも更年期を快適に過ごすひとつの方法です

更年期を快適に過ごす方法のひとつとして、安全にホルモン剤を補充する治療や最近では植物性天然エストロゲン作用をもつイソフラボンによる治療や漢方なども選択する時代になりました。ホルモン剤治療を受けるのなら、症状の出る50歳前後から始め、70歳くらいまでに終わるのが最適と考えています。どんな薬にも副作用はあるので乱用してはいけません、薬に頼らずがんばろうと無理をするより、知識をもって上手に活用することもたいせつです。

平均的な閉経の年齢は50歳前後。女性の平均寿命を85歳とすると閉経から約35年生きることになり、更年期をどう過ごすかは重要です。更年期の先にある老いをどう迎えるかということも深くかかわってきます。女性のからだは千差万別。治療を受ける受けられないも含め、専門家と相談のうえ、主体的に自分のからだに向き合ってほしいと思います。

木内 千暁(木内女性クリニック院長)

男にも更年期!?

40歳代半ば、心身のバランスをくずし、暑くもない部屋で寝汗をかいたり、睡眠薬がないと眠れない時期がありました。そのころ「男にも更年期がある」ということをきいて、自分の症状が更年期障害だと納得しました。それまでの私には男の更年期という概念がなかったために自覚ができませんでした。

40歳代、50歳代の男性は、俗に働き盛りといわれ仕事の重責を担う年代でもあります。男性は強くたくましく生きることを強いられてきたため、体力の減退、性欲の衰えをとまなう「男の更年期」を受け入れることがなかなか難しいのです。男性も老年期に向かうからだの変化を受け入れ、更年期とうまく付き合う術を見つける必要があると思います。

中村 彰(メンズセンター運営委員会座長)

生き方は芸術! 自分で創り出して いくもの

「できるだけ、自分にとって気持ちよく暮らせる道を探してきた。子どものころ家族というより友だちというほうが楽しかった。その延長ですっと生きてきた」駒尺さんは小西綾さん(1904年生まれ)と「友だち家族」をつくって50年になります。血縁を超え、同じ価値観をもった女性2人の共同生活。7年前から遠縁の駒尺貞真さんも加わりました。



駒尺 喜美
1925年生まれ。元法政大学教員(近代文学)。著書に『漱石という人』『魔女の論理』『女を装う』『女の本音男の本音』『老いの住宅大作戦』など。

社会は人間がつくり出したもの

敗戦のとき私はちょうど20歳でした。翌年、女性が「参政権」を得た最初の選挙で「自己決定」「男女平等」をはじめて自覚しました。戦前は女性に選挙権も財産権もなく一人前の人間とみられず、大学へもいけなかったのです。

そのころ、小さな新聞広告の「男女平等」ということばにひきつけられて、京都市文学園[※]に入学しました。そこで、世の中の仕組みはこうなっているということを知られ、所与のことと受けていた社会は、実は人間がつくりだしているものだけだということを知ったのです。ひとつの開眼でした。小西さんと出会ったのも京都市文学園の園長の紹介です。京都市文学園で学ばなければ今の私はなかったと思います。

大我は譲りたくない

自我意識には大我と小我があります。女性は大我のところであきらめて小我でこだわりをもつ人が多いようですが、私は大我、生き方の基本を曲げるのは嫌でした。結婚して夫の人生に付き合うというのは、大我を譲ることにしか思えません。女の問題を考える以前から、「結婚は一生飯炊きをし、子どもを産むこと、損やなあ」と周りの女性をみて、実感的に頭に焼き付いていたんです。当時は子どもを産むのは命がけでしたから、ひょっとしたら死ぬかもしれないことをなんで私がしなければならないのか、という気持ちがありました。

現代はセックス拡大文化、カップル幻想の時代

一般的に自立とは経済的、精神的自立といわれています。もちろん「生」の自立はたいせつですが、「性」こそ自立をと言いたいのです。

家族制度や結婚制度は、ある意味では男性支配制度です。これを維持するためにセックスの意味を拡大して、セックスはものすごく重要で素晴らしいよと、カップル幻想をまきちらしているのです。カップルでセックスして子どもを産むことが人間にとって一番たいせつなことと思込んで、結婚したり、相手を探したりしているわけです。相手がいなかったらさみしいとか、カップルでいるから幸

せということはないでしょう。カップル幻想によって性の自立が阻まれ、女性は自立ができないのです。セックスを本当に自分がしたくてしているのでしょうか。相手がしたがるからという人もいないのでしょうか。快樂のためなら人のからだをつかうなど言いたいです。

今がすべて、最後まで番

年をとるのは、それは大変なことです。しっかり歩いているつもりでも、足元がふらつとすることもあります。税理士がするような計算を全部やってくれていた小西さんが、気がつくともわからなくなっている。それが自分にいつおこるかもしれないわけです。

でも、年をとることが惨めだとは思いません。若いころ堂々としていた方がヨボヨボとワイルドに手をひかれていた姿をみて、おいたわしいと言う人もいますが、私はそうは思わない。どんなになっても今は今、今がすべてです。だから、もう年だからという発想もありません。どうすれば自分らしく生きられるのか、何歳になってもそれを考えているだけです。やりたいことを思いついたときがやるべきとき。たった1カ月でも1日でもいいからやればよいのです。

友だち家族を発展させた村づくり

2002年秋には中伊豆のライフハウス「友だち村」へ引っ越す予定です。高齢者住宅や多世代交流型住宅、宿泊施設もあり、自分らしさをたいせつにしながらかの合う仲間と支えあう住まいです。今まで好きなように自由に生きてきたので、それをずっと続けるための条件をどうすればつくれるのかと考えてきていきついた、ということです。

最近、生きることそのものがアート、芸術だと気がつきました。「生き方」を自分で創り出していく、これこそがアートです。「ライフアーティスト」現在の職業をこう表現しています。

※京都市文学園
1946年設立。戦争によって教育を受ける機会を奪われた若者に、学び舎を提供しようと京都の知識人たちが創立。運営は生徒の自主性にまかされ、「行動する思考人」の育成をめざした。園長の新村猛(仏文学)をはじめ、久野収(哲学者)、鶴見俊輔(哲学者)など、当時の学者たちによる講義は若者たちを魅了し、教室には学問への情熱があふれていた。

図書資料コーナー

40才からの老いの探検学 上野千鶴子著(三省堂) わたしは老いる……あなたは? メリリー・ワイズボード著(新書館) 私の目を見て バーバラ・マクドナルドほか著(原柳舎) エイジング・コンプレックス 海原純子著(講談社) メノポーズ革命 落合恵子著(文化出版局) 男たちの更年期クライシス 宮淑子著(日本放送出版協会) どうする更年期 女のからだを医療を考える会編集(日本婦人会) 更年期から楽しくなる 小山嵩夫ほか著(生活クラブ生協連合会) 更年期を生き生きと 丸本百合子著(時事通信社) 「わたし」を探る更年期 堀口文著(ネスコ) 更年期障害防ぎ方・治し方 野末悦子監修(家の光協会) 人間の生涯と性3 熟年の性 高柳美知子ほか編(大月書店) 人間の生涯と性4 老齢の性 北山郁子ほか編(大月書店)

図書資料コーナー

魔女の論理 駒尺喜美著(学陽書房) 女を装う 駒尺喜美著(勁草書房) 女の本音男の本音 駒尺喜美著(集英社) 吉屋信子 駒尺喜美著(リポート)